

柳生さん ドウモ申訳ケアリマセン。
シンガリヲ 飾ッテ 戴コウト 兎ッテ イラ入り
切ラナク ナツテ シマッテ 不手際 ナコト ナリマ
シテ。 本堂ニ スミマセン。 洋スガ。

JRPみえばん 百万石

17
臨時増刊号
1979-7-10
伊勢市古市町
東洋介
百万石編集部

写真教室出席者の所感集 (そのろ)

(宮間さん) —電話で—

また写真撮ってよかった。



(西井さん) —言葉ばかり(?)で—



くわべのことば> ひとことといえは、眠る前のふつと一杯のブラックコーヒーの味だ。皆さん、それぞれ何か熱いものを感じてお喋りになったと思います。行内さんと伊藤先生のコンビネーションのすばらしさに終始圧倒されておりました。

くはらのなか> はよう写真出したモンはよかったなあ。1時間以上も見てもらったモンもある。オレの写真時間なくなってして10分ぐらいいや。チクショウ。今度から早よなうべたら。 坂東組 西井ジョリジョリ

(小森君) レポート用紙に書いていい字で



皆さん 寄せがきの色紙とそれにお祝ひまでいただきましてほんとにありがとうございました。色紙大切に飾っておきます。さて結婚式の当日予期せぬところで予期せぬ人にお会いしてビックリ 照れて汗だくになった僕。そしてその僕と花嫁さんを撮ってくれた写真屋さんの小林さん、やはり写真は撮り慣より撮るほうがいい。おつと気が楽だ。あの時ほどアインダー覗きたいと思ったことなかったなあ。

そんな気持ちだったのにその後写真をさぼってありまして、この間の十津川以後はほとんどシャッターを押してません。少しはぼると撮ることおぼすことも忘れてしまいうでまたふり出しに戻ってしまったような気がします。その間に僕の標的はどこかに翔んでいってしまつたようです。

すこいすね 可ばらしいすね、隔々まで細かい心づかいが感じられますねこれからは頑張ってください。

頑張りますよ。
さて柳原の一夜はすばらしく良かった。久しぶりに写真で満腹まんぷく。これ以上食べれば胃弱な僕には消化不良。食べる食べぬは本人の自由だが あんなに美味しいものを食べぬは大損。食べ残しは大変失礼。もっと失礼なのは、美味しいものを食べてる人に自分の手料理をテリと出した人。そんな人いたかなあ。

それにしては夜があんなに短いとは。日頃の生活では、ます夜から眼を開けたまま朝を迎えたことのない僕に、東さん「眠るからたら寝ない」と。その時 心の中心「もったいない」「もったいない」と最後まで頑張る。

見ざるは損。聞かざるも損。
聞いても聞かなくても損しなくて失礼にもならないのが東さんの〇〇〇〇。
酒のつまみにあったあの固いコリコリしたもの(註:なまの昆布)元祖三重版に書かれていた「東さんが満さんに買ったコリコリしたもの(註:なまのわかめ)」で思い出したのは十津川撮影会の一夜、そして柳原の夜にあった焼きの恵かた写真、それが十津川のフニヤフニヤした僕の写真でした。

(一橋さん) —400字詰 4枚と、別に1枚—



写真は難しい。厳しいのだとみんなが知っている。だから、頑張っている。それでいてなぜ、三重支部はマンネリなのか。私達には見えていないことが、東京ではよく見える。この指摘は厳しかった。私などは頑張りが足りない。ぐうたらだ。冗談でなく、本音なのだ。だが、根かぎりの努力を続ける人がいて、なお、三重のマンネリ、エビゴネン。なぜこうなるのだ。

マンネリズムといひ エビゴネンといひ 意味はなにか。厳密な概念はさておき、翻訳すれば、アズマアリュウ(東洋流)ということなのではないか。

私にしては、大胆な発言だ。今まで正面切って言ったことはない。洋さんを畏怖していたからだ。写真はおろそか。人間としてもがけない。でも、もう年だ。「老いたち」の最後っ屁をひたつかましてやろう。老いの竹光抜いてみよう。

三重支部は東さんの核の今にすばり入っている。東さんがくしゃみをしたら、かなりの全員は風邪をひく程、強大な核である。

マンネリ脱出の道は核の今に入らぬこと。実はこれが難しい。洋さんの写真人生は、あくまでも洋さんの生き方。写真と人間の魅力をいつまでも、自分のお手本にしているとマンネリになる。アズマアリュウになる。(竹光を抜いた)。東さんだけを視野に入れているといつものまにやら、自分自身が東洋(か)的人人間になってしまう。写真もそうなる。人間はとも東さんみたいになれつけないのに、写真だけがそうになってしまうのではないか。洋さん、度々きしかめるけれど、自己の分身みたいな親近感をおぼえるかもしれぬ。指導にも熱が入る。これがマンネリじゃわい。ツイツイじゃわい。本人多分気づいていてもやめろとはいわない。

東さんの核の今。いや洋今に入らぬためには、東さんは東さん。自分は自分。私の立場なら昔も今も、これから全く別の道を歩いていくんだと自分を確信する。自意識過剰になっていくと、遂に洋今拒否にたどりつく。公園もの、日曜ものは、そろそろやめろといわれて、なにを洋今と突っ張り野郎を氣どっている。竹光だから切れ味はない。それでもマンネリともし言われるとそれは、私一個のマンネリであって、東さんの影響下のそれではない。とすれば、東さんが苦しい逆を求めらる中で、脱出を試みる。天気を速くたように再生は自分一個の責めに帰すと思うのだ。私のマンネリは支部のマンネリではない。

東さんから、かすめり、スリとつたらありがとさん。自分の穴へさつとにけこんで、ふたをしてしまぐらいいの固太さがあれば、エビゴネンと言われはすまい。

みんな、それそれの火灯をともし、火灯をかぶすしかない。

順不同。酔った頭に残っている断片。

東マンネリズム論

(工門先生の40年と比較して)
三重支部マンネリ化。エビゴネン。
きょうまた越えていない。長野より十津川へ行け。分る人分らない人。後継者は、きつと出る。モテフというところ。とるべきはとり捨てるべきは捨てる……。民衆の生活の尸史。うぬのあくやまー一山一会一自向ということ。東洋今に於ける戦後史と、写真による「私史」。マンネリズムかなせ思ひ。
灯台守の歌——喜ぶも悲しも幾歳月。火灯をともし火灯をかぶす。——未完成交響楽。僕は教条主義者じゃない。プロアマ。あいつが秀才なら、秀才という奴は……

(柳生さん) —「感想」とい—



あの日は俗に言う「写真教室」といったものとは桁が違いにちがっていた。学校教師である僕に言わせれば、生徒の心にくいこんでいく火灯熱した教育が広く深く展開された一日ではなかったろうか。

教師は、いまでもなく伊藤・竹内の両先生。
とくに伊藤先生は、如來をとりまく十二神将をほうふつとするくらいすまじかった。

作品をキザナル人。自分の作品と十分間のニラメッコさせられた人。ふたりの作品がドッキングさせられるかと思えば、ふたつの群に分けられて真中のない人。本人のより奥さんの作品がいいと喜ぶべきの悲しむべきかのハザマに立たされた人。少年野球を子して敵チームの子どもの写真の方がいいかと問題を投げかけられた人。焼き加減を比べられた人。自衛隊の本質に関わって重大な岐路に立たされた人……そして僕は「2年や3年、専本を撮って、もう壁たか崩れかたにぶつかるという……この思い上がりの奴!! いままで生きるつもりか!!」の一喝を受ける。それからあるまじく東洋先生と竹光がめぐっていった。

東洋マンネリズム論

——こまてくと写真リアリズムの本質にふれる高度な問題になってくる。ネオリアリズム時代に果した彼の役割は現在、もっとも厳しく課せられている。十津川の山は越えなければならぬ。そこで生きる人々を回向しなければならぬという。

あの日、参加した人それぞれが解決すべき課題を得た。三重支部の同色マンネリの打破は、それそれの生きざまの中で、力いっぱい振りつづけること以外にない……